

論文審査の結果の要旨

氏名 坂梨 夏代

本論文は、更新世末の日本列島を広く覆った大陸起源の細石刃石器群の起源地と考えられながらも、これまでほとんど科学的調査が行われてこなかったロシア極東地域にあって、ほぼ唯一と考えられる組織的な発掘調査を実施したセレムジャ遺跡群中の主要遺跡であるウスチ・ウリマ遺跡出土資料を、今日的な視点と方法に基づいて再分析した結果、従来明らかにされていなかった同遺跡の石器製作技術構造を具体的に解明した、独創的かつ貴重な研究である。

本論文は、9章から構成されているが、第I章「はじめに」と第IX章「おわりに」を除く7つの章が主要部分となる。第II章研究史および第III章では、シベリアにおける旧石器時代研究の歴史をその最初から記述し、本研究の研究史上の位置づけを確認した後に、その意味について述べられている。これまでの諸説では、縄文文化の大陸起源説が支配的であり、更新世末の日本列島に大陸から伝播し展開した細石刃石器群をその候補とみなす見解が有力であった。しかしながら、従来起源地にもっとも近いロシア極東地域の細石刃石器群の調査・報告例はきわめて少なく、代表的な遺物だけが報告されていた程度であった。そのため、本研究では、まずは出土資料の全体像を、現代考古学の問題構制に適合可能な形で報告し分析を加えることが目指されている。

第IV章と第V章では、ウスチ・ウリマ遺跡出土資料に関する具体的な記載と再分析が展開されている。まず第IV章では、既報に頼ることなく、資料全点の再実測と計測等の基礎作業に基づいた文化層の内容の整理結果が報告されている。2年間にわたる留学時の研究活動をまるまる費やしたその成果は、多数の水準の高い正確な実測図や各種の分析図表類の提示に結実しており、今後の細石刃石器群研究の進展に、きわめて大きな貢献をなしたと評価できる。そして第V章では、ウスチ・ウリマ石器群の主体をなす、細石刃・搔器・削器の個別分析に当てられている。この研究により初めて、ウスチ・ウリマ石器群の実態が明らかになったと言えよう。

結論にあたる第VI・VII章では、第V章までの分析成果に基づいて、ウスチ・ウリマ石器群の基本構造の解明が試みられている。従来大陸系細石刃石器群に両面体(尖頭器)石器群がどのように関係付けられているか不分明であったが、本論文によって、この両者がともに、ひとつの石器製作・運用構造を担っていることが明らかとなった。これはウスチ・ウリマ例にとどまらず、大陸系細石刃石器群の多くが分有する性格である可能性が高く、日本列島北部に展開する細石刃石器群の基本構造とも異なっている。とすれば、列島の細石刃石器群は、単に大陸の細石刃石器群がそのまま流入したわけではなく、伝播プロセスの過程で何らかの変容を起こしていたことを端的に示している(第VIII章)。

本論の成果によれば、従来の素朴な縄文文化大陸起源説は成立の余地はない。ただし、本論文が、ウスチ・ウリマ遺跡の実態とその分析に集中するあまり、少ないながら報告されているロシア極東の他遺跡との比較分析に手薄なこと、列島北部、特に北海道の細

石刃石器群との関係性に関する評価に具体性が足りない等、不満を感じさせる部分もな
くはないが、本論文の意義を損ねるほどのものではない。むしろ、論文提出者の将来の
課題とすべきであろう。

従って、本委員会は、博士(環境学)の学位を授与するにふさわしいと認めるものである。